平成三年七月十一日
於昼食会

中国をめぐる最近の情勢

東京外国語大学
教授
中嶋嶺雄

㈱国際関係基礎研究所

内容目次

〔一〕 北京を中心とする政治情勢……3
(1) 中国は依然として鄧小平の天下……3
(2) 気掛りな陳雲の存在……3
(3) 先送りされる重要事項の決定……5
(4) 趙紫陽の爆弾発言……6
(5) 五・四運動に相当する天安門事件……7
(6) 鄧小平の寿命が中国の政治を決める……8
(7) 毛沢東晩年に似る鄧小平……8
(8) チャンスもあった趙紫陽……9
(9) 何も変っていない基本的構図……10
(10) 「小瓶」、「小平」……10
(11) 政治の矛盾を突く江青の憤死……11
(12) 現代中国における三大自殺……14
(13) 新たに始った党内闘争……14

〔二〕 中国社会の内部情勢……16
(1) 「蘇東波を防止せよ」「南風を警戒せよ」……16
(2) 香港経済の傘に入る広東省……18
(3) 中国人は商業民族……20
(4) 広東省は独立王国……20
(5) 広東人と福建人……21
(6) 福建省を捉える台湾……22
(7) 「崇台思想」……23
(8) 現代の「三民主義」……24
(9) 香港、台湾が中国を変える……25
〔三〕 中国をめぐる国際関係……25
(1) ゴルバチョフのソ連に急接近……25
(2) 厳しいアメリカ議会の対応……27
質疑応答……28

〔一〕 北京を中心とする政治情勢

(1) 中国は依然として鄧小平の天下

一口に申しますと、現在の中国は、ポスト鄧小平体制への非常に微妙な移行期にございます。従いましてすべての問題が、言葉は悪いのですけれども、はっきり言うと「鄧小平死に待ち」というような状況になっているのではないか。鄧小平はこの八月に八十七歳になります。中国はもう江沢民体制で、政府は李鵬がちゃんとやっているから鄧小平にいつ何かがあってもいい態勢が出来ているはずではないか。そして現に鄧小平は、すべての公職を退いたはずではないかという見方が或いは一般的かと思いますが、私はそうは見ておりません。やはり今日の中国は、すべてにおいて鄧小平の天下であるという体制は基本的には崩れていないと見ております。

(2) 気掛りな陳雲の存在

勿論、鄧小平と並び称される同い年の長老に、陳雲という、私もしば〳〵名前をあげる大変な人物がいるわけでございます。最近はどうも陳雲を持ち上げる気風が非常に強まっておりますから、その点で鄧小平は、自分と同い年のもう一人の長老が気掛りであります。しかも人柄は非常にいいらしい方でございますし、首尾一貫した主張を唱えてきておりますから、鄧小平のように、次々に政治的な岐路に立った時に身をかわして、自分の部下を切り捨ててきた人とは違います。一貫した主張、つまり陳雲という人の主張を一口に要約すると、「鳥籠経済論」であります。やはり鳥の籠はきちんとした鉄の籠を作っておかないといけない。エサばかり与えているとやがて太った鳥が籠を破って逃げて行ってしまう。そうすると元も子も無いではないかというのが陳雲の考え方で

す。これをもう少し学問的に申しすと、社会主義計画経済をあくまでも基本とする、縮小均衡型の経済政策と言っていいと思います。

こういう立場ですから、鄧小平のようにあっちへ行ったりこっちへ行ったり、右へ行ったかと思うと左へ行くというような振幅がない。そして、いつもどこか控え目で、一歩引き下がっております。自分から声を張り上げて自分の自己主張を言うというよりは、肝心な時に一言言うという、そういう人があの中国という長老体制の政治世界にもう一人存在しております。現に鄧小平選集というのが出ておりますけれども、これと並んで陳雲選集というのが出ていまして、そういう人が依然として健在である。陳雲は老齢病弱ということが言われますけれども、最近ではやはりまだ健在だという。李鵬などは陳雲の前では全く先生と子供みたいなものだと言われるぐらいの存在でございます。

勿論、今の中国の改革とか開放という体制、これは後で詳しく申し上げますけれども、後に引き下がることの出来ないものだと思います。しかし中国がどうなるにせよ、鄧小平が批判されることは十分あり得るわけですが、陳雲が批判されるということは非常にその可能性は少ないのではないかと思います。

彼はとにかく一貫しております。日本の経済界の人達が、陳雲に会おうと思っても彼は会おうとしません。日本のある閣僚が陳雲に何とか会いたいと、日本の大使館を散々煩わせて、一週間北京で待っていましたけれども遂にアポイントメントも取れませんでした。恐らく陳雲という人は、生涯、いわば西側の指導者や経済人、或いは皆さん方もそうかもしれませんが、そういう陳雲から見ると、ブルジョア的な立場の人とは会わないということで筋を通すのだろうと思います。

鄧小平がだん〳〵年をとってきますと、対抗する者が次々に一人消え二人消えと消えていきますが、こういう

陳雲という存在が、最後までそういう立場でいるということは、鄧小平にとっては物凄く気掛りなのです。陳雲は、依然として党中央顧問委員会の主任をやっております。ついこの間までは鄧小平がそれをやっていましたが、鄧小平はすべての公職を退いた時に顧問委員会の主任も辞めました。それで陳雲に譲ったのですが、どうも鄧小平としては、この顧問委員会そのものも廃めてしまいたい。しかしながらまだそうはいかずに依然として残っております。

(3) 先送りされる重要事項の決定

鄧小平はやはり八十七歳ですから、中国当局者は口を開けば「鄧小平は元気だ。ついこの間も泳いでいた。今年の夏も北戴河の別荘に行って泳ぐだろう」と言うのですが、常識的に考えますと、いくら鄧小平が元気であっても、いよ〳〵人生の成熟時間を迎えていることは間違い無いわけです。そういう時間との戦いが刻一刻と経過しつゝある状況ですから、そういう意味では、いろ〳〵と問題があってもすべての明確なデシジョンはその後に送ろうというようなことになります。

先程、私が「鄧小平死に待ち」という言葉を言いましたが、これがどこまで続くのかは神のみぞ知るでありますけれども、全般的にはそういう状況が中国の政治の世界を支配しております。

ここで、鄧小平は依然として権力を持っているというふうに私が確信する所以は何かというと、公職は退きましたが、つまり彼は野にいる存在になったわけですが、しかしながら、実は党中央の秘密決議が、中国におけるすべての重要事項の決定は鄧小平同志に委ねるということを決めていることが問題であります。これは天安門事件が起きる前の中国共産党十三回党大会の時の秘密決議であります。

(4) 趙紫陽の爆弾発言

ご承知のように、あの天安門事件が起きる前、中国の民主化運動が起って北京が騒然とした時にゴルバチョフがやって参りました。一九八九年五月中旬であります。正確に言いますと五月十六日の午前中に鄧小平・ゴルバチョフ会議があって、午後五時から趙紫陽とゴルバチョフの会議がございました。

この時の模様は皆さんも或いはご記憶かと思います。以前この研究会でも申し上げましたが、たまたま当日は私もＮＨＫのスタジオに入っておりました。五時からの会議の冒頭十分間は、北京のテレビ局が放映するからというので待機しておりました。どういうふうに解説しようかなどと思っていたところ、趙紫陽はゴルバチョフと会談した冒頭から「中国ではすべての重要事項の決定は鄧小平同志に委ねられています。これは党の十三回大会における決定です」ということを言ったのです。その途端にゴルバチョフはびっくりして、目を白黒して、上を向いたり下を向いたりでありました。

当時、既に追い詰められていた趙紫陽としては、この機会を逃したら発言の余地はなかった。党の最高指導者、形の上での最高指導者である総書記の趙紫陽が、ソ連の当時の書記長との会談であるから、その冒頭部分はお互いの挨拶だろうと思っていたから全世界に放映すると言っていた。その瞬間を捕らえて、党の最高の秘密決議を党の最高指導者が暴露したのです。

これは言うまでもなく趙紫陽の打倒鄧小平の宣言でした。その瞬間に天安門広場のデモは百万の規模に膨れ上がり、「李鵬打倒、鄧小平引き下がれ」というスローガンで埋め尽くされたわけであります。そして状況は雪崩を打ったように趙紫陽に有利に展開していった。であるが故に、趙紫陽はやがて十八日から十九日にかけては余裕が出て参りまして、自ら広場に行ってハンストをやっていた学生達を見舞って、「自分はここへ来るのが遅すぎ

た。あなた方の要求は正しいのだ。当然だ。」と言って涙ぐんだわけです。これも皆さん二年前の事ですからご記憶のことでございます。

(5) 五・四運動に相当する天安門事件

当時の状況を分析しますと、事ごとに趙紫陽に有利になっていったわけです。だから余裕が出てきて広場に降りていったわけです。そういう状況の中でやがて五月十九日夕方三時間ぐらいどうしても趙紫陽の動静が分からなくなった。そこで結局趙紫陽は捕まってしまったのです。軟禁されたわけです。これをやったのが軍の指導者である楊尚昆とその実弟の楊白冰一族である。ですから趙紫陽を実際に軟禁しておいて、李鵬はその日の夜、あの上ずった声で「戒厳令だ」と言ったのです。

それで翌日戒厳令が公布されるのですが、まだ〳〵状況は膠着状態である。そこで六月三日の夜から四日にかけて、広場に僅か千名しか残ってない学生を排除するために、十万の正規軍を武装させて突入させたというのが天安門事件であります。

言ってみれば、民主化運動が起って、それを権力者が抑圧するという構図はどこにでもあるわけです。ある国のテイクオフの段階ではよく起ることですが、中国の事態が深刻であったのは、あの民主化運動それ自体も画期的なものであったことでした。五・四運動に相当すると思われるような鋭い政治意識をもって、人治の伝統を持ついわば家父長的な、そういう皇帝型権力に対して、初めて知識人や学生達は、法による統治、新しい政治感覚と政治意識による中国の造り替えを提起したわけであります。しかもその運動と党中央のまさに食うか食われるかの権力闘争が結び付いたということです。それを結び付けたのが幸か不幸かゴルバチョフの訪中でありました。

(6) 鄧小平の寿命が中国の政治を決める

こういうドラマが僅か二年前に起っているわけですが、この天安門事件の時に暴露されたのが、党中央十三回党大会の秘密決議であります。それ以降私も目を凝らして中国の政治状況を見ておりますけれども、この秘密決議が解消されたという報道なり証拠は一切ございません。ということは、表向き公職を離れても、すべての事が、鄧小平にお伺いを立てる体制になっていると見ていいわけであります。こういうふうに考えますと、やはり鄧小平の命というものが、依然として中国の政治を決定するという状況は変わっていません。

(7) 毛沢東晩年に似る鄧小平

鄧小平体制というのは、ある意味では毛沢東の晩年に非常に似てきているわけです。しかも毛沢東晩年を見ると、あの華国鋒なり四人組の出来事でも明らかなように、決して一枚岩どころではない。跡目相続をめぐって、本当の側近と、同じ側近の中でも言ってみれば四人組となった上海グループと、毛沢東にもっと前から近い存在であった華国鋒のような秘書とかボディーガードとかそういう所から上がってきたグループとの間で、毛沢東の遺体そっちのけで、喪が明ける前から跡目争いが始まったわけです。それで喪が明ける前日に四人組が捕まったというああいうドラマが起こっているわけで、そういう中国政治の一種の悪循環から、本当に断ち切らない限り、中国の近代化とか現代化ということは難しいと思います。その政治の悪循環を断ち切ろうとしたのが、あの学生達や知識人であって、鄧小平ではありません。

結局彼は、自分の足もとに火がついた時には、物凄い古いパターンで軍事力を導入したわけです。しかも具体的には楊尚昆とか楊白冰とか楊家一族という軍事ファミリーに頭が上がらないことになっている。これも毛沢東

がかつて自分の危機を林彪に救ってもらったが故に林彪に頭が上がらなかったのに似ている。それで林彪が大きな顔をし始めたことが林彪事件をもたらしているわけです。

今の中国は、一方で楊尚昆などが非常に大きな顔をし始めています。それから楊白冰という実弟が総政治部主任だけではなく、人民解放軍の秘書長となっている。秘書長というのは実は中国では一番重要です。要を握っているわけです。ですから鄧小平は、本当は楊尚昆や、陳雲に対する気持はもっと政治的なライバル意識であるにせよ、あの時に楊尚昆に頼らなければ、鄧小平自身がチャウシェスクのようになったかもしれない。本当にそうなった可能性は十分あったと思います。

(8) チャンスもあった趙紫陽

逆に言うと趙紫陽が、もう少し戦略戦術に長けていたり、彼が自分の将来を予測していたら事態は変わっていたでしょう。あの百万に上るデモが沸き上がっている民主化運動の最中、人民解放軍の中にはもう一人、どちらかというと趙紫陽に近いような秦基偉という国防部長がおりました。

中国ではだいたい国防部長というのが政治的に大変大きな意味を持っております。かつての彭徳懐、或いは林彪、みな国防部長（国防大臣）だったのです。ところが今回の一連の出来事で、あれ程軍が表に出たにもかかわらず、中国の国防部長は誰だったかとお思いになるぐらい名前が出ていなかった。秦基偉という人は、その後も活躍しまして、最近もソ連のヤゾフ国防大臣などと会談をしたりしていますけれども、どう見ても趙紫陽に近かったわけであります。ですから、いわば開明的な党官僚グループなり、軍の中の改革派がスクラムを組んで、鄧小平と李鵬を軟禁したという構図もあり得たと思うのです。

そうしたら今頃、中国は雪崩を打ったように大きな変化を遂げていたのではないか。東欧に先駆けて中国の民主化が実現したのではないか。しかもその素地は十分ある。中国共産党は殆ど大衆の支持を得ていません。人民解放軍も。みな軍から離反しておりました。それを結局力によって抑えていたにすぎないのです。

(9) 何も変っていない基本的構図

そういう基本的な体制なり基本的な構図というものは、この二年間、些かも改まっていません。あの民主化運動が掲げた様々な要求が、何か一つ制度的に定着したでしょうか。一切定着していない。のみならず、改革開放ということを口では言っていますが、改革開放というのは、他方ではやはり政治的な多元主義、すなはち少しは民主化をしていかなければいけないのですが、そういう体制には一切進展していない。のみならず学生達や知識人に対しては、依然として厳しい大変な弾圧政策を続けています。

(10) 「小瓶」、「小平」

特に学生達にとって、若者にとって希望がなくなったのは、今中国では海外に留学しようと思っても、大学生は卒業後五年間、プラス一年間を加えまして計六年間は一切外国に出られない。これは改革開放と言っておいて、一方で若者を留学させないという制度を国是としてしまったわけです。日本でも明治維新以来ヨーロッパへ留学し、戦後もアメリカへ多くの人が留学して初めて近代化が成り立っていくわけで、こういう体制で果たして今の中国が必要とする本当の意味の近代化というものができるかどうか。この体制が続く限り、中国は文化大革命で大きな知的空白、科学技術上の空白を得たのと同じようになる。とにかく五年間、大学生を一人も外国へ出さな

いということを決めているわけです。これはどういうことになるでしょうか。

そういう不透明な状況の中で、ついこの間、天安門事件二周年という状況を迎えました。この日は依然としてコントロールが厳しくて、外国通信社の人達も一切中国からファックスを打ってはいけない、電報を打ってはいけないという報道管制をしていたわけであります。しかしながら、北京の大学生達はご承知のように瓶を沢山集めてきて、それを地面に叩きつけたのです。お笑いと言えばお笑いなのですが、今の若者達の心理を、正に北京大学の学生が象徴したと言えましょう。あのビール瓶、小瓶、シャオピンというのは鄧小平トンシャオピンのシャオピンと音が全く同じであります。

(11) 政策の矛盾を突く江青の憤死

そしてこの日にもう一つ中国当局にとってショックであったと思われるのは、あの毛沢東夫人であった江青女史の自殺という出来事が確認されたことであります。ご承知のようにこれは、タイムのスクープでした。私は偶々タイムの仕事をやっていることもあり、発売よりも前に手許に入ることになっているわけですが、非常に小さい一種のアジア・パシフィック欄のベタ記事なのです。

しかしタイムはこれだけの記事を初めは観測気球としてあげました。複数のソース（sources）という書き出しがありますから、復数のところから得たのでしょうが、江青女史が自殺したらしいという報道を小さな目立たない記事で出しました。しかしながらさすがタイムですから、それがアッという間に世界中に広がりました。中国当局は内務次官の談話でそんなことはないとその事実を即座に否定したわけであります。ところが遂に否定しきれなくなって、まさに天安門事件二周年の六月四日に江青女史の自殺を当局も認めざるを得なかったということ

であります。

これは非常にシンボリックな出来事ではないかと思います。私はこのニュースを聞いて、いかにも江青女史らしいなと思いました。私自身はかつて文化大革命を大分批判し、毛沢東政治を批判してきたつもりでございますけれども、しかしながら毛沢東が死んだ後ああいう形で江青夫人を捕まえて、四人組と言ってすべての罪悪を江青夫人になすり付ける。現代の魔女狩りみたいなことをやっている限り、中国は駄目だと思っていました。何も問題は解決しないのです。同じようなパターンを繰り返すだけではないか。

本当は毛沢東を含めて五人組です。いくら江青夫人が、ああいう形で政治にのさばってきたといっても、これはやはり毛沢東がそうさせた。毛沢東のことをいろ〳〵話しますと時間が経ちますから省略しますが、本当に映画女優あがりの藍蘋（らんぴん）という江青夫人は若い頃きれいでしたし、毛沢東は惚れ込んでいたわけです。そして毛沢東が政治の世界で孤立化すると、結局自分の奥さんとか、政治秘書である陳伯達とか、それからボディーガードをやっていた華国鋒とか、こういうところに頼らざるを得なくなったのが毛沢東政治の構図であります。そういう中で、何と言っても毛沢東の権威があったからこそ江青夫人はあそこまでやったわけです。

しかも、もし本当に四人組が悪ければ、毛沢東健在中にそれを党としても何とかすべきだったのですけれども、それは結局出来ずに毛沢東が死んでから、つまり喪主を捕まえて断罪したということです。これは四人組裁判の時もそうでしたが、江青夫人にすれば自分は正当だというわけで、恐らく彼女は喉頭ガンを患っていたといわれますから、それは事実なのでしょうが、もう自分が悲嘆にくれて自殺したとは私は思いません。

中国人はそもそも自殺しないのです。日本や先進国、特に日本人なんかは割合自殺する。それと自殺の美学があるわけです。日本と中国はこんなに同じ文化を共有しながら、この点は根本的に違う。従って三島由紀夫の自

殺については、当時私は香港にいたのですが、いくら中国人に解説しても分からない。ましてや、一種の葉隠の美学と言うのでしょうか、陽明学をあそこまで突き詰めていったような三島由紀夫的な美学、死というものを人生の最後を賭けることによって自己を結晶させるというような、そういう価値観は中国人には絶対無い。中国人の考えとして生と死というのは、メタルの裏と表のように連続してますから、死屍になっても悪者は悪者で唾を吐きかけたりいろ〳〵するわけです。

そうしますと、自殺するということはどういうことかというと、抗議の意思としての自殺しかない。物事には例外がありますから、こう言うのはきつすぎますけれども、やはり抗議の死、憤死なのです。江青女史は自分の生涯を最後まで一貫させて憤死した。勿論ガンであったという病苦もあったかもしれません。それが或いは死に結び付いたのかもしれませんが、やはり最後までいかにも江青女史らしかった。

最近の中国は一方で改革開放というとを言います。これは後でお話ししますように結局ブルジョア化する、西側化するということになります。従って、それを防衛する。しかも世の中は社会主義がガタガタと崩れて、東欧もソ連も隣のモンゴルまでが社会主義から離脱しようとしている状況です。それを何とか食い止めるためにも、もう一遍毛沢東思想を、ということで最近はまた復活しています。

本当に文化大革命を否定し、個人崇拝を否定するならば、毛沢東の肖像を天安門広場に掲げておくことも止めなければいけない。しかしそれは中国には出来ない。そして一方で毛沢東を再び盛んに引用し始めている。これは明らかに論理的にも矛盾するわけです。他方では改革開放だと言う。この矛盾をいわば突いたのが江青女史の自殺ではなかったか。だから中国当局者は今のような政策を続けている限り、江青女史の死を嘲笑うことはできない。むしろ彼らにとっては、大変な衝撃だったと思いますし、是非隠しておきたいことであったと思います。

(12) 現代中国における三大自殺

建国後の中国でこういう形の自殺は、江青女史で三人目なのです。勿論いろ〳〵例外はありますけれども、私はそういうふうに言っております。最初の自殺は一九五五年に起こりました高崗です。四十九年十月一日の建国の式典には、毛沢東、劉少奇、周恩来、それから高崗という順番で天安門の楼上に登ったほどの人であります。この高崗は、スターリンとは親密であったわけですが、当時は中ソ友好時代ですからスターリンの手先とは言えないので、東北（旧満州）を独立王国化させようとしているということで、またお決まりの国民党の手先だということで逮捕されて、そして獄中で自殺したという報道が人民日報に載りました。それはやはり高崗の抗議の死だったと思います。

それから二番のドラマは、有名な作家の老舎です。「駱駝祥子」とか「四世同堂」などで有名な老舎が、文化大革命の時に入水自殺をしました。これは汨羅（べきら）の淵に身を投げた屈原の故事に因むような死に方で、まさに文革に抗議した老舎の死でした。そして今度の江青夫人であります。私は今度の江青夫人の自殺を現代中国における三大自殺の一つと言ってもいいかと思います。

(13) 新たに始った党内闘争

さて、そういう状況の中で、中国は政治の上では、決定的な判決の覆しとか、決定的な意思決定ということは出来ない状況だと冒頭に申しました。そういう中で、一方では明らかに趙紫陽とは違うけれども、結局改革開放をやらざるを得ないという立場の人達と、そして陳雲のような、絶対に社会主義を堅持すべきだという人達の、新しい党内闘争が始まっているということであります。

中国には本当の意味ではもう改革派はいないと私は見ております。鄧小平を改革派と言うのなら、自分のやったことを本当に改めて、趙紫陽を復活させなければいけない。天安門事件の判決を覆えすべきです。しかしあの時は徹底的に弾圧をしたわけです。そういう限定の中で最近目立つことは、明らかに改革開放ということを結局はしなければいけないという立場の人達、そういう人達がいろ／＼と言い始めているのに対して、それと全く対照的な意見が他方に出ているということであります。

天安門事件で失脚した、且つての政治局常務委員の胡啓立とか、その他の二人、閻明復（えんめいふく）とか芮杏文（ぜいきょうぶん）というのですけれども、胡啓立は大物でしたが、天安門事件の時に失脚した党中央の書記クラスが、最近復活して次官級のポストに就いたというような問題があります。

他方では、上海に解放日報という新聞がありますが、明らかにペンネームで、黄浦江の黄浦という字をもじりまして、皇甫平というペンネームを使った一連のシリーズ論文が出ております。これはむしろ改革開放を推進すべきであって、保守派はけしからんといったような論調なのであります。

文化大革命の初期にも、北京に毛沢東はいられなくなって上海に行って、例の江青夫人が牛耳っていた文芸サロンを中心に、つまり姚（よう）文元とか王洪文とか（王洪文は後に加わった人ですけれども）張春橋、そういう人達を中心として文革の狼煙を上げました。そして上海から北京を攻撃しました。これと同じような形で、今、北京を攻撃しているのだというふうに香港の雑誌あたりは盛んに書いています。新しい南北戦争であるとか、そして上海から北京を攻撃しているのだとか、鄧小平がそれを後ろで操っていて、鄧小平の北爆が始まったのではないかという論調はありますけれども、その辺はどうなのか定かではない所がありますが。

いずれにしても、再び、三度中国は路線闘争が深刻になっているということであります。しかし決定打はない。

先程申しましたように、みんなが竦んでおりますから、余りやり過ぎると危ないと思っております。次の舞台が必ず来るだろうと思っていますから、そういう状況の中でお互いにジャブをやっているという感じでもあります。こういう所が中国の政治情勢で、これを以て必ずしも改革派の復権とも言えません。胡啓立は確かに趙紫陽と一緒に失脚しました。趙紫陽まで復活させるというのなら分かりますが、それがない限り改革派の復権とは言えないでしょう。

趙紫陽は党中央総書記でした。党の総書記、書記長でした。それが行方不明になって、いろ〳〵噂はありますが、我々が彼の最後の姿を見たのは、二年前の天安門広場に降りてきて涙ぐんだ姿です。それ以来見ていないわけです。本当は、日本の政治家の方々が次々に訪中するのですから、「趙紫陽さんはどうされていますか」ぐらいのことを聞くべきだと思います。今回、海部さんも行きますけれども、どうも日本の政治家は中国の首脳に会うと、最初から位負けしてしまって、言うことも言えずに帰ってくるのではないかと思うわけです。

〔二〕 中国社会の内部情勢

(1) 「蘇東波を防止せよ」「南風を警戒せよ」

今まで申し上げたのは北京を中心とする政治情勢ですが、中国社会の内部はどうかというと、これは政治情勢とは、全く、いわば別個な所で非常に大きく変わっているということを申し上げざると得ません。むしろ我々はそこに注目すべきではないか。中国では最近、改革派といわれる人達も保守派も含めて「蘇東波を防止せよ」ということを盛んに言っています。この蘇東波というのは、皆さんもよくご存じの宋代の詩人の蘇東坡のことで、

この蘇東坡の坡をもじって波と書きまして、ソ連、東欧の波、つまり脱社会主義の傾向に警戒せよ、断固これを防ぐのだというわけです。

これを一方で唱えながら、他方では、南の風に警戒せよというのです。南の風というのは何かというと、香港や台湾の影響ということであります。蘇東波につきましては、とりあえず今のところ防止して いるわけであります。天安門事件を弾圧したことによって防止したわけですが、南の風はやはり隙間なく入ってきていますから、これを防止することはできない。蘇東波と言いますのは、いわば社会主義が崩れていくということであります。これを何とか軍事力によって押さえ、イデオロギーによって一応持ち堪えているわけですが、南の風は香港や台湾の生活そのものの影響として、経済そのものの影響として、もろに及んできているわけです。

私、つい最近、エズラ・ヴォーゲル教授（ハーバード大）の著書を翻訳致しまして、今、日本経済新聞社から「中国の実験」という題名で先週ぐらいから発売されて、今本屋に並んでおります。エズラ・ヴォーゲルは「ジャパン・アズ・ナンバーワン」で皆さんにはお馴染みですが、元々中国研究者であります。社会学者なのです。私も昔からよく知っている間柄でもありますから、この彼の本を訳すことになって、漸く最近翻訳が終わったところです。この本を訳していながら、そしてまたこの本を訳すに際して、つい最近も中国の華南地方を自分の足で歩いてみました。

結局中国にとって改革とか開放とは何なのか。一口で申しますと、改革とか開放ということは、これまで許されなかった革命国家の民衆に、資本主義的なインセンティブを認めたということなのです。もっと分かり易く言えば、おカネを儲けてもいいということを認めたのが改革開放なのです。

これを党中央が認めた途端に、中国社会は内部から変わり始めました。今まで毛沢東思想を掲げてどれだけ教

育運動をやったか。マルクス・レーニン主義を今でも掲げています。しかしこれによっても殆ど変わらなかった中国が、おカネを儲けてもいいというそのインセンティブによって、ガタガタと内部から変わり始めました。これが今の中国の実態なのです。一度変わり始めたこの状況というものは、後には戻りません。

こういう場合には、勿論日本とかアメリカとかの影響、西側諸国の影響もあるわけで、中国の当局者は天安門事件についても、結局これは西側が中国の社会主義を内部から転覆しようとしていると言っています。しかしそれよりも、もっと直接的に響いてくるのがこの南の風なのです。

(2) 香港経済の傘に入る広東省

特に広東省は、エズラ・ヴォーゲルの本が詳しく分析しております。私自身も屢々香港にも広東にも行きますが、広東は完全に香港の影響下に入り始めました。これは、非常に大きなサイズでそうなりつつあるわけです。香港ドルが、深圳の経済特別区のみならず、それを越えて広東省一帯にももう流通していることは言うまでもありません。

特に珠江デルタの中でも、小三角洲というインナーデルタ。ちょうど香港があり、九竜半島が対岸にあって、それからやがて汽車に乗っていくと深圳の経済特別区に行きます。それからその隣に、広州まで行く間に皆さんもよくお通りになったかもしれませんけれども宝安県とか東莞県とかいう農村地帯があります。この辺を内側にして、インナーデルタと言われる珠江の小三角洲は完全に香港経済とリンクしているわけであります。

そしてもう少し、今度は広州とか、仏山とかそういう所をとった大きな三角洲、珠江デルタ一帯が、これは澳門(マカオ)のすぐ近くの中山県、あそこの珠海という所も経済特別区になっていますが、それらを含めて完全に中国共

産党が目指すマルクス・レーニン主義の世界とは全く百八十度違う方向に社会が動き始めております。

特に広州の人達は、数年間、或いはもっと言うと十年間ぐらい、本当に鎖国から開放されて全く別世界を見た。今まで香港などというと、同じ広東人だけれども彼らはみな祖国を捨てて逃げて行った者だ。あんなブルジョア的な、資本主義のごみ溜めみたいな所に住んでいる連中ではないかと馬鹿にしていたわけです。

それが改革開放ということで、香港との窓口が開かれた途端に、持っている製品にしても、電気製品にしても、着ているものにしても、ファッションにしても、流行にしても、それから経営システムにしても、金融システムにしても、毛沢東思想でやればそれが一番いいのだと言われ、それを信じて教えられていた人達にとって、全く別の価値観によって動いている物凄いバイタリティーを持つピカピカした世界が存在していることが分った。しかも日本人とかアメリカ人ではなく、同じ、みんな言葉も通じる自分達の同胞が、そういう世界を作ってそこに活き々々しているということが分かってしまったのです。その途端に共産党がどんなお題目を唱えても、そんなものは全く画餅に帰してしまうわけであります。

特にテレビの影響は圧倒的でした。初めは華僑の人達が持ち帰ったり、或いは何か役得があって西側に出て来たり日本に来て買ってきたとか、そういう人達が持っていたテレビが町に入るとみんなが見に来た。それが大体皆がテレビを持てるようになってきて、香港のチャンネルがどん〳〵入ってくるわけです。

そうするとその途端に、北京の放送などは見る気もしないという状況でありますが、それと同時にテレビの画面を通じて、正にリアルタイムで全く別世界の実像が入ってくるわけです。これは如何ともなしがたい。つまり情報空間というものが、西側の情報空間の中でも最もアグレッシブな形で、香港の情報空間が既に広東省一帯を捕らえているということであります。

(3) 中国人は商業民族

しかも広東省の場合は、従来のかなり貧しい所でありまして、特に山間部、山あいが多かったが、それが、改革開放ということはつまりおカネ儲けをしてもいいということを党中央が認めざるを得なくなった途端に、山まで動きました。本当に山間部までいわば金銭的なインセンティブによって動かされるようになりました。町へ出稼ぎに行く。換金作物を作る。それからいろ〳〵創意工夫を凝らしておカネ儲けをやる。一度そういうことが許されると、中国人ほどそれに適合する民族はない。

タテ社会が日本だとするという中根千枝先生の言葉を借りると、中国社会はヨコ社会であります。ヨコ社会というのは、流通とか、物を転がしたり、そういうことで儲ける社会なのです。それが今の中国を覆ってしまっている。

(4) 広東省は独立王国

そこへもってきて広東の場合には一種の独立王国になっております。最近中国では諸侯経済といって、盛んに北京はそれを批判しております。諸侯というのは各藩が分布しているような状況です。いろ〳〵統計をとってみると確かにそうなります。

広東省の場合は、税金の九十％を内部留保しまして、北京には十％しか納税しないわけです。しかも広東省は、過去、香港の影響で経済成長が非常に高かったわけですから豊かになります。北京は苛立ちます。それを見て上海あたりは文句を言うわけです。上海の場合は約七十％か七十五％を北京に納めております。上海のＧＮＰはかなりのものですし、上海の財政収入はかなり大きな規模でありますが、いくら財政収入があってもそのうち、

七十五％が北京へ持っていかれているわけです。

こういうシステムは、他方では地方分権、権限の分散化ということを言い始めた党中央の弱い所を掴んで、地方が言うことを聞かなくなったわけであります。特に広東の場合には、国家主席にもなった葉剣英の息子に葉選平という人がいました。この葉選平が、いわば広東の省長として頑張ったのです。何といっても葉剣英の息子ですからそれなりの影響力もあります。しかし最近この葉選平が省長を実質的に解任されました。ということは、ここにも中央と地方との戦いにおける深刻な事態があるわけで、こういう問題も今後の中国を拘束させていくでしょう。

(5) 広東人と福建人

もう一つは福建省であります。福建省は、これはまた広東省と隣同士だから同じように考えていいと思われるとしたら、これは大きな間違いであります。福建省の省都は福州でありますが、何と言ってもここの中心は厦門（アモイ）です。厦門は経済特別区になっておりますし、経済規模の大きい港町です。台湾からみると福州のすぐ対面にあるのが馬祖島です。厦門のすぐ対面にあるのが金門島であります。

香港からも飛行機で一時間ぐらい乗れば厦門に着きます。従って広州とか広東一帯が香港の人で溢れており、香港とのビジネスの関係が非常に強化されているわけですから、厦門でも飛行機で一時間ぐらいなら、香港の影が一杯あるかと思いきや、全く香港の人はいないのです。こゝは福建人の世界、福建語の世界であります。

特に福州の南に閩江（びんこう）という大きな川が流れております。あの辺は川が大きいと、川岸を越えると言葉も違ってまいります。十キロぐらいで同じ福建語系の方言でも言葉が違ってきます。閩江の北を閩北、それから

閩江の南を閩南といいます。この閩南の言葉というのは、少しは違いがありますが、大きくいってこれがいわゆる福建語であります。そしてこれがいわゆる台湾の言葉、台湾語であります。結局台湾の人達は、国民党と一緒にやってきた者はともかく、その多くは皆この福建から出て行った人達です。でありますから、言葉の世界ではちょうど香港と広東が広東語の世界として統一されるように、完全に福建語の世界なのであります。

これはいろ〳〵と民族性にも現れてくるわけで、広東人と福建人はうまくいかない。勿論、同じ広東人でも、潮州人と広州の人達はうまくいかないというような問題もありますが、やはり福建と広東は非常に違います。広東の人達というのは、皆さんもご承知のように非常にぎすぎすしております。カネ儲けが非常にうまくて香港の人達は抜け目無い。福建の人達は、台湾人を見れば分かるように丸いです。どことなくおおらかで、一見、絶対に悪いことをしないような感じの人達が多い。勿論それにも例外がありますが。

(6) 福建省を捉える台湾

ご承知のように、台湾は最近経済が非常に活況を呈しております。台湾の李登輝総統が、偶々日本に来るか来ないかなどという話がいろ〳〵ありまして、私も昨日、今朝と忙しい思いをしたわけでありますが、中国よりも台湾の方が経済規模が大きいのですから、今日本にとっては日台貿易の方が日中貿易より大きいのです。しかも台湾は一人当りのＧＮＰも八千五百ドルとなっております。広東省のあたりは、私は千ドル以上いっていると見ているのですが、平均すると三百ドルぐらいですから大陸に比べると台湾の方は三十倍近い。

経済の格差というのは、水のように高い所から低い所へと流れていきます。台湾海峡ぐらいすぐに通じてしまうのです。勿論、今はまだいろ〳〵制限がありますけれども。ご承知のように、中国と台湾との間の交流は日々

に進んでおりますし、台湾の経済的、社会的影響力が、福建省を捉えております。厦門あたりに行きますと、台湾旅荘などと書いてあるので何かと思うと、台湾のお金持ちに買ってもらいたいマンションであります。皆てぐすね引いて台湾を待っているわけです。皆やはり同じ同胞でありますから、何故台湾がこんなに豊かになったかということを知っているわけです。

(7) 「崇台思想」

特に中国は天安門事件以降二年間は、ご承知のように西側諸国が制裁しまして、日本からも観光客が非常に少ない。それなのに台湾は李登輝総統の懸命な政策もあって、大陸訪問、近親訪問を許したわけです。むしろこういう時こそ行っていらっしゃいと。去年一年間で百万人もの人が大陸を訪れております。しかも彼らは有り余る品物とおカネを持って、親戚や一族郎党を訪れるわけです。そういう地縁、血縁のネットワークが横に広がっていますから、そこに入る情報と、モノとカネというのは物凄い影響力です。ですから、台湾が如何に豊かであるかということは福建省の人達はみんな知っているわけです。

余りにもそういうことになるものですから、最近中国では台湾問題工作会議という重要な会議が開かれました。そこで先程の楊尚昆が報告しているわけですけれども、楊尚昆は何と報告したか。「崇台思想の克服」、崇台思想というのは台湾崇拝思想ですが、台湾崇拝思想が蔓延しているということを言っております。こういうような状況がございます。私はそれらの状況を見ますと、存在そのものは非常に大陸に比べれば小さい台湾が、やがて中国社会を変えていく、もう変えつつあるではないかと思います。

(8) 現代の「三民主義」

厦門は、ちょうど香港を思い浮かべて頂くといいのですが、厦門の港町から十分ぐらい、フェリーがしょっちゅう出ております。鼓浪嶼島という島があります。その島に行きますと、島の真中に大きな小高い丘がありまして、丘の上に大きな岩があります。その岩を日光岩というのですが、日光岩に上って観光用の望遠鏡を覗くと金門諸島が見えます。僅か七キロの距離です。つまり中国大陸に近い所にある金門島の一つに、「三民主義統一中国」と書いてある。それが望遠鏡で見えます。晴れた日にはよく見えます。私もついこの間見てきました。

三民主義などというと時代錯誤かと思われるでしょうが、私は今の中国共産党が二十一世紀まで保つだろうかと考えさせられます。或いは二十一世紀まで仮に保っても、鄧小平体制は保たないでしょう。そうすると、中国がソ連や東欧のように、今の社会主義体制が解体していくという可能性は非常に強いわけで、そういう時に複数政党制ということも当然起り得るかもしれません。

三民主義、しかも現代の三民主義というのは、民族、民権、民生というかつて孫文の唱えた三民主義を現代的に解釈して、台湾側では自由、民主、均富ということを言っているわけであります。もと〳〵三民主義というのは、フランス革命の自由、民主、博愛を孫文が言い替えているわけであり、それはまたアメリカ独立革命の人権宣言以来の、いわば西側というよりは人類の普遍的な原理の反映でもあります。

これからは、そういう人類の普遍的原理というものが、結局は生きていく時代になっていくでしょう。これほど世の中が多元的で、これほど国境がなくなってボーダーレスの時代に、モノの考え方が違うからといって、それを銃でもって抑えるというような世界が長続きするはずがありません。これほど交流が激しい時代に、外国へ行ってはいけないとか、誰が来てはいけないとかいうことは、やがて無くなっていかなければいけません。

(9) 香港、台湾が中国を変える

こういうことを考えますと、台湾が中国を変える、或いは香港が中国を変えるというふうに考えていいではないか。香港は確かに九十七年の六月三十日を期して中国に還りますから、あと六年を切りました。しかしながら、この六年間、果たして鄧小平体制が保つだろうか。ひょっとするとそちらの方が先に崩れるかもしれない。香港は現に経済的には大きな影響力を持ち始めているのだということを、香港の人達に申し上げているわけでありますが、こういう情勢がやはり今後の趨勢ではないかという気が致します。

〔三〕 中国をめぐる国際関係

(1) ゴルバチョフのソ連に急接近

そこで最後に最近の国際関係について触れてみたいと思います。国際関係の中で注目されることは、中ソ関係と米中関係だと思います。湾岸戦争以来、中国はかなり従来の米中関係とは違った振舞いを示しております。アメリカに対して、非常に接近していた時代と違って、アメリカはやはり覇権国家であるとか、アメリカが唱える国際新秩序というものには中国は反対であるなど、いろ〳〵なことを言っております。

その反面ソ連に非常に歩み寄っている。そのソ連もエリツィンのようなソ連では困る。とにかくエリツィンのソ連は中国としては困る。ゴルバチョフのペレストロイカも賛成ではないが、しかしゴルバチョフのソ連であれば、やはり社会主義を擁護してくれるというふうに中国は期待しております。この間も江沢民がまいりました。

エリツィンは去年は浪人していましたから、日本にも十日間も来ていました。彼をアジア調査会が呼んだもの

ですから、私も随分エリツィンの話を聞いたりしましたけれども、とにかく日本に来て、日本の社会を見てびっくりしてしまったのです。そして帰国してから脱党しました。共産党を離れて新しい政党を作り、新しい立場でロシア共和国をやっていくのだと、結局彼は、現在ロシア共和国の大統領として復権してきているわけであります。

エリツィンは、市場経済というものがこんなにダイナミズムを持っているのかということを確信して帰っていった。ですから、ゴルバチョフ来日の際、ゴルバチョフを海部総理との首脳会談につなぎ止めるだけが能であったのかどうかと私は思います。確かに北方領土問題が大事であったにせよ、もっと彼に日本を見てもらいたかったと思います。そうすれば彼自身が本格的に改宗したのではないか。

それはさておいて、エリツィンの部下で、仲間であり同志でもある、非常に人気の高い改革派にモスクワ市長のポポフという人がおります。ポポフは去年の十一月に台湾を訪問したときに、ソ連に無い物が一杯台湾のデパートや街の中にあるものだから、エリツィンが日本で感じたように、びっくりしてしまいました。かつては国民党、反動派の中華民国などというのは、ソ連は触れることさえ出来なかった。その台湾にモスクワ市長が行って、物が一杯あるというので、向こう五年間に六十億米ドルの買い付けを約束してきました。

六十億米ドルというのは、今の日ソ貿易の全部がその程度にいくかいかないかくらいですから大きい。しかもそれをソ連ではなく、ロシア共和国で買いましょうと決めてきた。そしてモスクワの市会議員に台湾へ行って来なさいと言って、十一月下旬には、皆改革派の市会議員が大挙して台湾を見に行った。

やはり現代のアジアというものを日本ももう少し考え直さなければいけない。来年は日中国交二十年になります。日本は台湾の存在というものを無視してきたのですが、どっこい台湾は生きていた。それどころか非常に大

きな活力を持って今、アジアに存在している。これはやはり市場経済、民主主義国家の強さということだと思うのです。

こういうふうに考えますと、エリツィンのソ連は中国にとっては困るわけであります。何とかゴルバチョフのソ連では社会主義を維持してほしいということで、最近ソ連に非常に接近しております。そしてついこの間の江沢民訪ソ前後には、ソ連からミグという戦闘機ならともかく、ご承知のようなSU27という爆撃戦闘機を大量に買い付けることを約束し、中国空軍のパイロットがソ連で訓練を受け、そしてソ連の飛行機が中国の基地でデモンストレーションをやるというようなことになってきております。こうなりますと、アメリカとしても台湾に対してはF5Eという戦闘機を中心として、もっと性能の高いものにしなければいけないということになるかもしれませんが、いずれにしてもそういう構図が一方で出来ております。

(2) 厳しいアメリカ議会の対応

アメリカではブッシュ大統領が国交樹立以前の中国連絡事務所の初代所長をしていたということもありますから、何とか中国との関係を改善したいと考えておりますが、どうもこのところアメリカと中国との間には隙間風が吹いております。のみならず、アメリカ議会は非常に厳しいのです。先程申しました中国の学生達に対する人権抑圧、それから人口問題での避妊の強要や、それから囚人が造った安い製品をアメリカに売っているとか、いろ〳〵な問題が出てきました。

そして、もう一つ議会が厳しいのは、中国はあんなに援助援助と言っているけれども、自分はあちこちから援助をもらっておいてあちこちへ兵器をばら撒いているではないかという懸念であります。確かにイラクにもイラ

ンにも売っていました。勿論西側諸国も売っていましたが、中国は貧しい貧しいと言いながら、あちこちに売っているというわけです。そして最近は、シルクワームという、ご承知のようにスカッドミサイルを更に中国的に改良したようなものを、イラン・イラク戦争のときにも売っていましたし、それをシリアであるとか、パキスタンであるとか、そういう所へどん〳〵出しております。

今度海部さんが中国に行って、第四次円借款が問題になると思いますが、少なくともそういう武器輸出を中国が止めてくれなければ日本は円借款をしませんぐらいのことを、我国はやはり言ってもいいと思います。

そういうことで非常にアメリカ議会が厳しい。漸く最恵国待遇が一年間延長されるかされないかというようなところですが、こういう状況の中で、中国をめぐる国際環境も変動してきております。ですからアメリカ議会は日本に対しても非常に厳しい。これから日米間においてもコメの自由化の問題とか、いろ〳〵厳しい問題があるわけです。日本が日中友好という七十二年の時の枠組だけで中国問題を見ていると、これまたアメリカ議会あたりが、ジャパン・バッシングのいい材料にしかねないという雰囲気が出てきているということを最後に申し上げまして、私の今日のお話にさせて頂きたいと思います。長い間ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

○　「鄧小平の死に待ち」、少し穏やかに言えば、鄧小平がもし何かの時には一体どういう人が出てきて、どういう体制に変わっていくのでしょうか。

中嶋　これはいろ〳〵なシナリオが書けるわけです。よく学者などは一、二、三、四、五ぐらいのシナリオを並

べるだけですが、それは余り意味が無いと思います。予測というものは当たり外れはありますが、それなりの根拠に基づいて推理する私の一つのポシビリティーをまず申し上げますと、やはり趙紫陽が復活するかどうかという問題があります。趙紫陽は七十代になりましたけれども、まだ〳〵中国の政治的な寿命からすると十分やっていける人でありますし、かなりの人脈を持っているわけです。

ですから、一つには鄧小平がいつ亡くなるかという問題がありますが、仮にそうなって趙紫陽が復活したということになりますと、その弾みが大きいと思うのです。趙紫陽個人の問題ではなく、あれほどの犠牲を払って失脚した人物が復活するというのですから。そうしますとこれはどういうことになるかというと、今の共産党一党独裁体制の解体の方向に行く可能性があると思います。まさに民主化運動が求めたものはそれだったのです。ですから趙紫陽も自らの復活をそういうダイナミズムの中で求めていかない限り、彼は単に復活したにすぎないですから、それでは趙紫陽の存在意義がありません。ですからやはりそちらの方に乗っていくでしょう。

いま、ソ連、東欧の波ではないけれども、モンゴルまで変えつつあります。現在世界に社会主義というのは、中国と北朝鮮です。キューバ、ベトナムもありますが、実際には中国と北朝鮮です。ベトナムも大部変わりつつありますし、キューバはカストロが頑張っていても、これも現在中身はガタガタしております。そうなりますと一体アジアに残った共産主義体制がどうなるのか。

私は中国が変化する可能性は非常に大きいので、その時にひょっとすると中華人民共和国の解体ということもあり得るのではないか。そしてそれはある意味での中国の民主化運動をもたらすでしょう。そういう構図を一つ私は描いているのです。

○　その場合に、天安門事件の時にもいろ〳〵と、どちらかというと鄧小平のやり方を弁護するような議論があ

りました。それはどういうことかというと、あんなふうにして急激に変わった場合に中国は一体保つのかということです。つまり経済的な問題にしても、みんなが自由市場などというと大変なことになりはしないか。実際に中国の生存ということから言って、一挙には無理だ。だから道中に段階をつけなければいけない。そのためにはああいう学生運動を許したならば中国は保たないのではないか。そういう弁論がありました。このへんはどうでしょうか。

中嶋　一つは、民主化というのはある程度豊かさを伴って初めて実現すると思うのです。ところが中国の場合に、おっしゃるように北京における学生達の要求というのは、ある意味で中国の国情を超えた民主化要求であったという見方があると思います。

ただ具体的に中国をいろ〳〵見ておりますと、中国というのは余りにも共産党の独裁がひどすぎるのです。それは、今アジアの他の低開発諸国というか、後発諸国でも、曲がりなりにもそれぞれの選挙ぐらいはやっております。中国で選挙をやったなどということを聞いたことがありましょうか。確かに、共産党の幹部を選ぶのに中央委員会の選挙をやりますけれども、一般の庶民が投票所に行って選挙などというのはやっていないわけです。最低限のフィリピンなどで許されていることさえも実は、中国では許されてないのです。それがまず一つ突破口としてあるということです。

それからもう一つは、広東省にしてもそうですが、経済的には実質的な一人当りＧＮＰも既に千ドルを超えてきております。そういう所に、全く政治的な参政権を許さない形で統治していくことはもう不可能だと思います。学生達もこの間僕らに言っていましたが、中国とはすべてが党幹部である。しかも党幹部というのは、汚職をやり、自分の特権を行使している世界だ。そこをやはり学生達は要求したのであって、そういうことを考えますと、

やはり趙紫陽あたりに対する期待が大きかった。或いはその前の胡耀邦に対する期待が大きかったというのもそういうことだと私は見ております。

勿論、急激に西側諸国のようになるわけにはいきません。けれども、それをある程度分権化するなり、そういう方向で何らかの形の多元性というものを許して、政治の参加を許さざるを得ないのではないかと私は見ております。

○　新疆ウイグル、チベットの話をお願いしたい。

中嶋　これも大変重要な問題です。確かに、人口比からするとだいたい九十％が漢民族ですから、ソ連における民族問題とは少し違うといえますが、チベットはご承知のように、今年チベット和平協定ができてから四十周年ということで、非常に注目されていると同時に、徹底的な弾圧が加えられています。新疆ウイグルについては、この地区はトルコ系住民ですから、イスラム系、トルコ系住民が、今ソ連の中のトルコ系住民と共に国境を離れて流動化しつつある。これを非常に恐れております。それからもう一つ、モンゴルの問題があります。外モンゴルはかなり自由になってきましたから、その余波が内モンゴルに及ぶのではないかということで、非常に警戒しています。

ソ連では、いわゆるエスニシティといわれるような民族問題、エスニック、エスニシティという、いわば、従来の国民国家レベルにおける民族問題とは違った、言語とか地域、或いは宗教などに密着した民族問題が出てきております。そういう意味では中国でも依然としてそういうものがあるわけです。ただこれ迄は、本当に共産党の一党体制の中で、漢民族優位で抑えてきたから余り表には出ていなかった。今後中国が、徐々に、とにかく開かれていくことは間違いない。徐々によくなっていくことも、経済水準が上がってきているわけですから間違い

ない。そうすると、そういう少数民族問題というのは中国にとって深刻になるわけで、これが恐らく次の課題になるのではないでしょうか。

○　先生が中華人民共和国が或いは解体するかもしれないとおっしゃいました。そうすると例えば東北、或いは広東、そういうものが独立してしまうということがあり得るのでしょうか。

中嶋　そこが難しいところです。中国というのは常に並進化の衝動と共に一元的になりたいという中国民族の特性があります。そういう意味では文化大革命の混乱期においてさえも中国は解体しなかったわけで、そう簡単に分散しないという問題がある。これは民族的な、歴史的な衝動と言ってもいいと思います。そういう伝統的な中国が漸く民主化運動などを通じて違った中国に移行し始めようとしたその民主化の芽が出てきたのです。だからそれを抑えたと思うのです。

　或いは、中国的な事大主義、中華思想、こういうものがいわば中国をまとめてきたと思うのですけれども、これからの中国はそういうものを持たなくなるかもしれない。だからいろ〳〵な中国があってもいいではないか。そういう時代にやがて移行していくのではないかというのが私の展望です。それは二十一世紀の課題でしょう。

○　昭和二十一年にソ連の軍隊が引揚げます時に、ソ連国境のレールを全部外して持っていっておりまして、それが私が昭和六十一年にソ満国境へ行きました時も、やはり路盤だけが残って鉄路は撤去されたままになっております。旧満州を鉄路のないままにしておくということは、中国の経済力が弱いからなのですか。それとも中国東北部というのは見放されているのか。インフラストラクチャーを整備する力がないのか。しなくてもいいと思っているのか。その辺は如何でしょうか。

中嶋　確かに毛沢東時代は、旧東北区、先程申し上げた高崗の事件もそういう所に発生するのですけれども、満

州が独立王国化することを非常に警戒しておりましたから放置しておいたのだろうと思います。それを強化すると、逆にソ連に持っていかれやしないか。或いはソ連と結び付く勢力が出るのではないかという警戒感があったと思います。ただ最近は、中ソ関係が非常によくなってきておりますので、その点で恐らく、鉄道建設その他が再びかなり行われ始めているらしい。

同時に、中ソ鉄道というのは、今、内モンゴルから外モンゴルを抜けていく鉄道と、旧満州を通る鉄道の二本あるのですが、それに対して新しい中ソ鉄道を今造っているのです。これは、このところ余り記事になっていませんが、今年か来年完工します。新疆ウイグルからカザフ共和国に抜ける、一番近い中ソ鉄道なのです。これが今、急ピッチで建設されていますから、そういう意味で中ソの経済交流は今後進んでいくのではないかと見ています。

○　今、先生のお話をお聞きしていると、中国は本当に大変な可能性、いろ〳〵な変化の可能性、についても大変な可能性を持っていると我々としては理解できるのではないか。これからも、我々が持たなければならないような時代が来ている。そういうふうな感覚を私自身も、また次の機会に中嶋先生からその後の中国についてお話を伺いたいと思います。もありがとうございました。

発行日　平成三年十月九日
発行人　新井　俊三
発行所　㈱国際関係基礎研究所
㈱エグゼクティブ・アカデミー
〒一〇六　港区南麻布一―五―一四―六〇二号
電話（〇三）三四五二―二七七〇